

Aurion

DECEMBER 2024
VOL. 44

NEWS LETTER

VOL. 44

ニュースレター「アウリオン」

COLUMN

建物に文字を刻む
右往左往の六〇年代後半
こころのふるさと吉野山

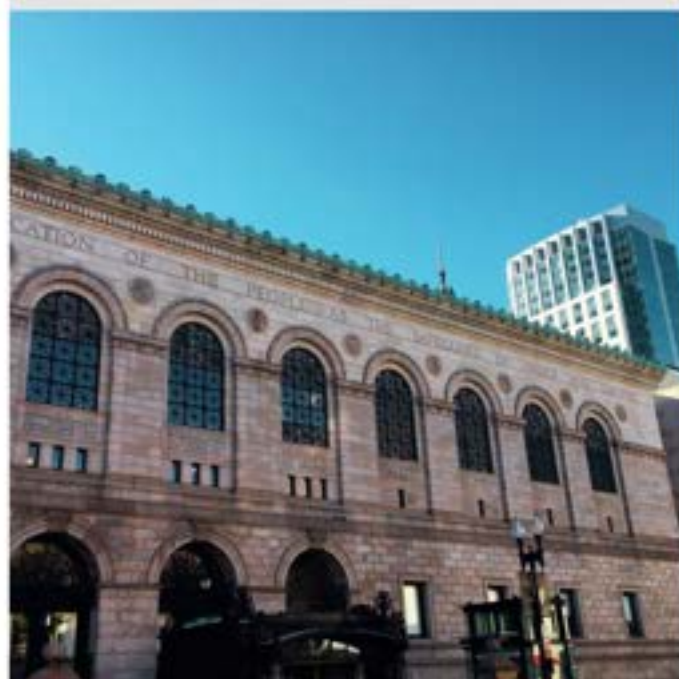
REPORT

講演会報告
「フランスにおける三島由紀夫受容」
プロジェクト活動報告

INFORMATION

アウリオン叢書最新号
イベントのお知らせ





建物に文字を刻む

言語・文学研究センター長 平尾 桂子

アメリカ、特に東部では、建造理念が碑文として刻まれている建物をよく見かける。そのひとつ、ボストン市立図書館を紹介しよう。

ボストンがあるマサチューセッツ州は、アメリカで最も古い植民地の一つとしての歴史を持つ土地だが、同時にアメリカで最も古い公共施設を数多く創設した州でもある。公共地下鉄網、公共海水浴場（Revere Beach）、公立植物園（Public Garden）、アメリカ初の公立高校（Boston Latin School）など。ざっと思いつくだけでもいくつも列挙できる。

上述のボストン市立図書館は1888年に完成したアメリカ最古の公立図書館であり、かつ公衆に無料で公開された史上初の近代的公立図書館だ。イタリア産の大理石をふんだんに使い、美術館と紛うばかりの内装の美しさや壁画の壮麗さで、観光名所としてもよく知られている。

この旧館の北側ファサードに刻まれているのは次の碑文だ。

THE COMMONWEALTH REQUIRES THE EDUCATION OF THE PEOPLE AS THE SAFEGUARD OF ORDER AND LIBERTY

「コモンウェルスは秩序と自由の守護のために民衆の教育を要求する」

すべてが大文字で綴られ、「コモンウェルス」（ボストンのあるマサチューセッツ州の正式名称）以下、名詞に定冠詞THEがついている。つまり、コモンウェルスとは他ならぬ（この）マサチューセッツ州であり、民衆というのはどこの誰でもない（我々）民衆である理解を、書き手と読み手が共有していることを前提とした文章だ。また、「秩序」と「自由」という理念のためコモンウェルスが「要求する」という能動態で綴られていることも、この文章を重厚で力強いものにしている。

そして東側の正面ファサードに彫られているのは以下の献辞だ。

THE PUBLIC LIBRARY OF THE CITY OF BOSTON BUILT BY THE PEOPLE AND DEDICATED TO THE ADVANCEMENT OF LEARNING

A.D. MDCCCLXXXVIII

「ボストン市の公立図書館は民衆によって建てられ、学問の発展のために捧げられた
西暦1888年」

さらにこの献辞のずっと下、正面入り口の上にはFREE TO ALL（万人に無償で）とある。

自由と秩序。時として対立する二つの理念をつなぐのは法の支配であり、それを根幹から支えるのは教養ある市民だ。自由を守り秩序ある社会を形成し維持するのは市民に開かれた教育にほかならない。そして、この教育は貧富の差にかかわらず提供されるべきだという公教育の理念が見事に表現されている。この建物はただの文化遺産ではない。分断を深めるこの世界にあって、未来に向けた希望のメッセージなのだ。

ボストンに行かれたら、是非この図書館を訪ねてほしい。



2024年度第1回言語・文学研究センター主催講演会

フランスにおける 三島由紀夫受容

講師：トマ・ガルサン先生
 （日仏会館・フランス国立日本研究所所長）
 日時：2024年7月1日（月）16:20~17:50
 会場：本学1204教室
 （Zoomによるオンデマンド同時配信）

五月晴れとなった7月1日、講演会「フランスにおける三島由紀夫受容」は、国文・仏文の研究者や学生を中心に、対面とオンライン合わせて約30名が集まるなか開催された。

講演者のトマ・ガルサン先生は、ヨーロッパにおける三島由紀夫研究、ひいては日本近代文学研究を牽引する存在である。翻訳家としての顔もあり、昨年春にフランス語で三島の演劇論を上梓、いまはグループで三島の短編小説集の翻訳にも取り組んでおられるという。また、2022年には、言語・文学研究センターの研究員として数か月間、白百合で研究活動をされていたご縁もある方だ。

そんなガルサン先生によるご講演は、三島由紀夫の読者・批評家が必ずと言っていいほど陥る、とある「事象」についての言及から始まった。それは、われわれが三島作品を読むとき、作者本人のイメージが強すぎるあまり、作品に集中できないという困った事象である。たしかに三島自らが築き上げた生きざまや死にざまのイメージは、ときにその作品を飲み込み、押しつぶすほどのインパクトがあると言ってよいだろう。

文学作品というのは本来、読み手の解釈を通して無限の拡がりをもつものである。だが三島由紀夫作品においては、作家像（イメージ）が作品にも参照されてしまうことによって、テキストへのアプローチを凝り固めてしまう。作品解釈を邪魔する作家、あるいは作品が作家を説明する—こんな文学者がほかにいるだろうか。

そして同じように、三島の作品には三島自身と重なる登場人物が多過ぎるという点も厄介な呪縛となって分析の邪魔をしていく。われわれが三島について知っていればいるほど、作中の人物と三島のパーソナリティとの共通点がチラついて仕方がない。

この「どうやっても三島がでてくる現象」をガルサン先生が「三島は窓から放り出しても、ドアから入ってくる」と表現されていたのが、実に言い得て妙だった。

フランスにおいても、三島作品はその人生や死を通して受け入れられたという。ノーベル文学賞に5回も推薦されるほどの作家だから生前からいくつもの作品が仏訳されてはいたが、1971年の自決以降、そのセンセーショナルな死にフランス世間からも注目が集まった。ヨーロッパがもつ、いかにもオリエンタリズム的なイメージ＝「侍の切腹」という宣伝効果を狙って、フランスの出版業界では三島作品の翻訳出版作業が急ピッチで進められてゆく。このときはとにかく速さ（もちろんコストの安さ）が求められたため、翻訳は日本語からではなく、すでに刊行されている英語訳からフランス語訳が作られたという。つまり、フランス語初訳の彼の主要作品の多くは英語を経由していたことになるのだ。

もちろん、今となっては英語から重訳されることはなくなり、日本語からフランス語に直接訳されている。それでもまだ作家が遺した作品群の約50パーセントしか翻訳されていないのだという。とりわけ彼のエッセイについては、やはり晩年の憂国感情が政治的・思想的に右翼と見なされるため、海外での出版や研究は活発に行われていないのが現状だそう。こちらはガルサン先生の今後のご活躍に期待したい。

（本センター助手 吉田 怜美）



右往左往の六〇年代後半

本学名誉教授・本センター客員所員 篠田 勝英

2024年7月1日、国文の井上隆史さんの企画で、フランスの若き三島由紀夫研究者トマ・ガルサン氏（日仏会館・フランス国立日本研究所所長）による講演会が開かれました。近年、外国の日本文化・文学研究者の日本語運用能力は、私の世代の外国語・外国文学研究者の平均的な当該言語運用能力をはるかに超えるレベルに達していて、この日もみごとに日本語で繰り広げられる三島論に終始聴き入っていましたが、『憂國』（小説と映画）への言及があり、三島由紀夫の晩年にあたる1960年代後半のことがさまざまに思い出されてきたのです。今からざっと55年から60年ほど前のことです。二十歳前後の若者には想像しにくい時代でしょう。それも当然、私がその年齢だったときの60年前というと日露戦争と第一次世界大戦の間の頃ですから、当時の私にとってその時代のことはすべて書物や古い映像の中に収められた「歴史」にほかならないものでした。今の学生たちにとっての昭和40年代前半（1965年から70年）もそのような「歴史」でしょうから、果たしてどれほど興味を持ってもらえるか、心許ない気もしますが、昔話に耳を傾けていただきましょう。

三島由紀夫の短篇『憂國』は1961年に発表されていますが、原作・脚本・監督・製作・主演をひとりでやってのけた映画の公開は五年後の1966年でした（作品の完成は一年ほど前だったようです）。当時私は高校三年生、つまり受験生でしたが、その時点で見ていなかったのは受験勉強で忙しかったからではなく、また公開時いわゆる18禁（成人映画指定）だったからでもなく、三島をほとんど読んだことがなかったし、映画館に通う習慣もまだ身についていなかったからです。もちろんメディアに登場することの多い人物としては知っていましたが、狭い読書の範囲にまだ本格的には入ってこない作家でした（記憶に残る乏しい読書は芥川、太宰、同時代では大江健三郎が中心だったようです）。しかし周囲の先駆的な文学少年・映画少年（高校の新聞部や映画研究会に依拠する俊英たちです）は何人かが見に行ったようでした。そのひとりから、映画は30数分の短篇であること、白黒の無声映画で台詞は皆無、音楽は一貫してヴァーグナーの『トリスタンとイゾルデ』、などと聞いたのを覚えています。

上映館はアート・シアター系列の新宿文化でした。明治通りを挟んで伊勢丹の筋向かい、靖国通りに近い方にあったこの映画館には大学に入った頃から足繁く通ったものです。最初に見たのは、大島渚が白土三平の劇画を直接映画化した（劇画の印刷面をカメラで撮影した）『忍者武芸帳』だったと思います。その後は同じ監督の『絞死刑』『新宿泥棒日記』『少年』、羽仁進『初恋：地獄篇』、岡本喜八『肉弾』、篠田正浩『心中天網島』など同時代の日本映画の印象的な作品が続きます。フランスの監督数人によるドキュメンタリー『ベトナムから遠く離れて』、ゴダール『ウィークエンド』、ピーター・ブルック『マラー/サド』（やたらと長いタイトルなので当時の省略形で）なども新宿文化で見たのです。

ところで『憂國』に話を戻すと、短篇映画ですからこれだけでは興行的に成立しにくかったでしょう。封切時にはルイス・ブニュエル『小間使いの日記』との併映であったということを最近知りました。前述の文学少年・映画少年の中にはこちらが主眼であった者がいたと聞いて、早稲田だったんだなあ、と感心してしまいました。

私自身は、といえば、『憂國』を見たのは、新宿の紀伊国屋ホールで月に一回ほど開かれていた名画鑑賞会だったと思い込んでいたのですが、今回、古いメモやノートを発掘していたら、意外にも「高田馬場パール」という名画座であったことが分かりました。やはり同時上映の作品があり、それがなんとスティーヴ・マックィーン主演の『砲艦サンパブロ』だったのはどういうわけでしょう。マコ岩松という日系の俳優の助演が話題になった映画ですが、『憂國』との取り合わせは特に理由がないとみるしかありません。

高田馬場まで見に行ったのは1969年2月のある日のことでしたが、その頃はネットはもちろん、情報誌『ぴあ』もまだ創刊されていませんから、上映の情報はおそらく新聞の映画案内欄で見たでしょう。今や新聞には映画の広告や映画評は出るけど、名画座を含めた映画館ごとの上映案内はなくなってしまったようですね。

映画の話題ばかりになってしまいましたが、文学に話を移すと、入試と発表の間の宙ぶらりんの十日間ほどの時間にカミュの『ペスト』を読んだのを今もよく覚えています。強い印象が残りました。

だが、他の著作に手を伸ばすのには少し時間がかかり、仏文科に進学してからようやく『異邦人』を原書でたどたどしく読み始めるまで、カミュは近寄りたがいない存在でした。

大学入学後、読書の範囲は少しずつ広がっていましたが、今でも忘れられないのは、大江健三郎の『万延元年のフットボール』です。出版はたしか1967年の秋だったと思います。近年の村上春樹の新作刊行に伴うメディアや熱心な読者の熱狂ぶりとは比較になりませんが、少なくとも大学生の間では例外的に大きな話題となって迎えられた作品でした。所属していた理科のクラスでさえ、「『フットボール』買ったか？」とか「もうすぐ読み終わる」などという会話が交わされたのです（実はドイツ語クラスだったので気取って「フースバル」で話を通じさせることもありましたが、稚氣愛すべし、と言っているものや...）。

それからしばらくして長いストライキの影響で学事暦が大きく狂い、その分自由な読書に使える時間は増え、あらたな発見もいくつかあり、特に永井荷風と森鷗外に親しむようになりました（なぜか『猫』以外の漱石は今でも苦手です）。三島の代表作もひとつおり読み終え、尊敬する先輩（音楽美学専攻）が熱烈な三島ファンだったことも影響され、目を離せない作家のひとりになっていました。

ちなみに1969年5月のいわゆる「三島由紀夫vs東大全共闘」の討論会は、三島が会場に入ってくるところから終了直前まで出席していましたが、夢中になって聴いていたわりには、今にして思うと残るものは大きくなかったと感じます。最後を端折ったのはどうしても動かせない家庭教師の仕事があったからで、まことに後ろ髪引かれる思いで会場を後にしましたから、終わりまで残れたら、また別な感慨があったかもしれません。そしてその時から一年半が過ぎ、1970年11月25日を迎えることになります。

その日の午後、私は清水徹教授のポール・ヴァレリー「若きパルク」講読の授業に出ていました。学部生には荷の重い作品でしたが、清水先生の熱のこもった授業はフランス語がたいして読めない学生たちにも大きな刺激となっていて、緊張を持続させないといういけない講義でしたから、終わるといつもぐったりしていたものです。この日授業を終えた先生はすぐには立ち去らず、学生たちに向かって、実にざらりと「三島由紀夫が自殺したの、知ってる？」と問いかけたのです。

愕然としました。さらに驚いたのは学生の中にもすでにそのニュースに接していた者が、少数ですが、いたことです。私の最初の反応は、奇妙なことに、なんでそんなたいへんなことが起こったのに、いつも通りに授業をしたり、受けたりできるのだろう、という不満に近いものでしたが、少しずつこれが一文学者の自裁にとどまらないとんでもない事件だと分かってくるにつれ、何をどう考えていいか分からない混乱状態に陥っていたようです。

帰り道、釣瓶落としの秋の陽に追われるようにたどり着いた御茶ノ水駅の新聞売場で（駅の売店とは別に新聞・週刊誌だけ売って屋台のような売場がありました）、自宅で取っているのとは別の新聞を二種類買って、その場で立ったまましばし読みふけりました。紙面から眼を上げると、いつもと変わらぬ駅前の雑踏。遠くには順天堂病院、神田川の岸の斜面の一部が見え、西の空が夕日に染まり始めていました。これまでとまったく同じ、見慣れた光景ですが、どこか心細さのようなものを感じながら眺めていた気がします。もっともこれは何度も思い出した特別な日のことですから、知らず知らずのうちに修正してしまった疑似記憶かもしれません。

疑似記憶といえど、この日が数日以内に、過去の大きな事件を繰り返し思い出していたような気がします。7年前のほとんど同じ日付、すなわち1963年11月23日、私は国分寺の東京経済大学を会場とする高校受験の模擬テストを受けに行っていました。その日の朝刊には間に合わなかったニュースですが、テレビラジオで速報を聴いていた友人から、ケネディー大統領が暗殺されたという大事件を知らされ、深甚なショックを受けました。その日一日、試験問題を一通り解くことに思いは未知のアメリカに飛び、詳細はまったく分からぬまま、歴史の瞬間に遠いところで立ち会っている、という思いで頭がいっぱいになっていたようです。その記憶は今も確かですが、しかし中学三年の時の経験を1970年の事件の際に鮮やかに思い出していたというのが事実かどうか、考え始めると自信がなくなり、これも疑似記憶ではないか、という気がしてきます。思い出話を繰り返すと疑似記憶はますます増大し、ますます精緻に再構成されていくのかもしれません。昔話を聞く時は、そのあたりに心して耳を傾けてください。

こころのふるさと吉野山

本センター研究員 成田 みずき

私は、大学、大学院と日本の古典文学、特に、中世和歌文学、説話文学を学んでまいりました。作品を読みつつも、古典の舞台になっている場所に立ち出かけるようになりました。ここ数年は奈良県の吉野山をよく訪れています。

今回、言語・文学研究センターより、奈良県吉野町について書きませんか、とお声がけをいただきました。

吉野山は役行者や西行ゆかりの地で、和歌にもたくさん詠まれる場所なのでいつか行かなければと思っていました。初めて訪れたのは2016年の8月で、もう8年前になります。

真夏も過ぎた頃で当然葉桜でしたが、とにかく桜の木が多さに驚きました。これは桜の咲く時期に来なくてはと思い、次は、2019年4月に訪れました。下千本は桜の花が散り始め、桜吹雪の中、七曲がりの坂をくだったことを覚えています。

吉野山の桜(ヤマザクラ)は信仰の証として植えられてきました。満開の時はそれはもう美しいですが、散る時もまた美しいと教えてくれます。風で花びらが舞った様子は貫之の歌にあるような「水なき空に波さたけける」でした。

吉野山とその景観はさまざまな様子を見せてくれます。春は桜。奥千本で偶然聞こえてきた法螺貝の音。初夏は新緑、真夏の緑の色濃い山々と青空、雲の流れの速さ、明け方の朝の大合唱。秋には紅葉、鹿の鳴き声。紅葉散り敷くとはこういうことか・・・と、散ってなお美しいものに気づかせてくれます。そして、冬の日に晴れているのに時折ちらつく雪。年間を通して、雨が降った後に山々に広がる雲海も幻想的で印象に残っています。



また、山内で12時と17時に流れる音楽も季節ごとに変わるので、密かな楽しみです。

そんな中、金峯山寺の蔵王堂を眺めるのも、好きな時間のひとつです。国宝のお堂はいつ見ても惚れ惚れするほど立派です。お堂の中から外を眺めるのも好きです。お堂の中には、秘仏蔵王権現立像がおられます。初めてご開帳の時期に訪れた時は、その大きさに圧倒されました。さらに上回るお堂の大きさにも驚かされます。

桜の時期以来のこれまで、何度か訪れています。ここ2、3年で頻りに訪れるようになりました。2022年の百日回峯行の満行の日に立ち会ったこと、2023年に金峯山寺の三大行事のひとつである「蓮華会・蛙飛び行事」を見学したことがきっかけです。

これまで、大峯山で回峯行が行われていることを知りませんでした。たまたま吉野山で一泊した翌日が満行の日でした。翌2023年にも回峯行をされる行者さんがいらっしゃるとのこと、今度は満行の日をうかがい、その日に合わせてまいりました。満行の日に蔵王堂で出迎える人々、お堂での満行式はまるで絵巻物を見ているかのようでした。

「蓮華会・蛙飛び行事」は、午前中に大和高田市での「蓮取り行事」を行った後、蓮を吉野山に運び、金峯山寺で法要をし、「蛙飛び行事」が行われます。両方の行事を一度に見学できないかと思い、探したところ、奈良観光バスの「蓮のみちバスツアー」というものを見つけました。バスでの移動でしたが、修験者がたどる道を体験させていただきました。運とともに移動しているような感覚も面白かったです。

吉野山は2004年7月7日にユネスコ世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録されました。今年は世界遺産登録20周年記念ということで多くのイベントが行われています。

TOPPAN株式会社では、蔵王堂と秘仏蔵王権現立像のデジタルアーカイブに取り組み、このたびそのデータをもとに製作したVR作品「金峯山寺」が公開されました。先日、「デジタル文化財ミュージアムKOISHIKAWA CROSS」にて鑑賞の機会をいただきました。

映像では蔵王堂を普段見られない角度から見たり、蔵王権現立像も今までは下から見上げるだけでしたが、お顔の高さの位置から見られたり、初めて見る景色もあり発見がありました。いつものお参りとは違い、中に入り込んだ形での不思議な体験でした。

これまで訪れた吉野山での出来事はとても紹介しきれませんし、まだまだ知らないことも多く、これからも訪れたい場所です。人もよく自然も美しく美味しいものもたくさんあります。吉野山で出会った方々には、いつも助けていただいています。今回も、多くのご縁により書き終えることができました。立ち止まって考える機会をくださった方、ご縁をつないでくださった方、助けてくださった方々、ほんとうにありがとうございました。またお参りに行きます！



KOISHIKAWA CROSS® 潜入レポート

本センター助手 吉田 怜美

2024年10月某日、文京区・TOPPAN株式会社本社ビルのエントランスに、期待と緊張を湛えて赴いたのをよく覚えている。今回われわれが潜入したKOISHIKAWA CROSS®とは、TOPPAN本社ビル内に今年7月に新設されたばかりの、デジタル技術を活用した文化財施設である。デジタルと名の付くものには疎いため、実際に体験するまで、一体どんなものを鑑賞できるのか具体的なイメージは湧いていなかった。

社内を案内されてたどり着いたのは施設名の書かれた壁と重厚な扉の前。その扉の向こうは次の4つの施設からなる。

①ゲート...四方を黒い壁に囲まれた空間で、金の雨粒のような光が降り注ぐと鳥居型のゲートが出現。ここからすでに異空間へと誘われる。

②VRシアター...全長20m、高さ5mの超巨大LEDで16Kの超高精細VR映像を鑑賞。金峯山寺と「金剛蔵王権現立像」の迫力と荘厳さに圧倒される。[↓写真参照]

③ギャラリー...文化財のデジタル資料を手元の端末で自ら操作しながら細部まで見て学べる体験型ギャラリー。

④エキシビジョンルーム...伊藤若冲による幻の作品「釈迦十六羅漢屏風」の復元プロセスを鑑賞(実物は焼失したとされている)。壁面・床面に投影されるモチーフが生き生きと躍動し屏風内に集合する様は圧巻。

最新鋭のVR技術によって凄まじい臨場感・没入感、ときにはスリルをも味わい、アトラクションを体験したに近い満足感があった。実物を生で鑑賞するに勝る楽しさがあるが、ただエンタメとして消化するのではなく、企業から文化財への確かなリスペクトを感じられた。

この文化財アトラクションをみなさんにもぜひ一度体験してほしい。



シロヤマザクラ



奥千本



下千本の桜



蓮の花



蛙飛び行事



回峯行満行の日



西行庵



1月の朝勤行前



3月の朝勤行後の日の出

more information

金峯山寺
ホームページTOPPAN
ニュースルーム

近代文学研究会

プロジェクト
活動報告

本センター研究員



大塩 香織

令和6年前期の「近代文学研究会」の活動も無事に開催できましたので報告いたします。

令和6年前期もオンラインにて土曜日に開催という点はこれまでと変わりありませんが、今期から月に1回の開催に変更になりました。参加者の多くがすでに就業しており、毎週末に時間を設けるのが難しくなったためです。使用したテキストは以下の通りです。

有島武郎「カインの末裔」

島崎藤村「ある女の生涯」

梶井基次郎「闇の絵巻」

上記の通り、開催日が減ったため扱ったテキストの数も少ないですが、その分参加者がそれぞれ十分に準備ができるようになり、活発な議論をすることができました。議論の方式は希望者がいれば発表者がレジュームを用意し発表、それを叩き台に議論をする場合と、希望者がいなければ参加者から作品を募集し、自由に議論をする場合があります。今期はすべて自由討論の方式で行いました。自分の研究対象ではない作品を読むことになるので、新鮮な気持ちで新たな視点を得られた参加者も多かったようです。



藤村ゆかりの地・馬籠宿



本研究会では、現在も参加者を募集しております。現在論文の執筆をしていない方でも、文学作品に触れる機会として、また論文を書き始める機会として、ぜひ研究会をご活用いただきたいと思います。もちろん修士課程や博士課程に在籍中の方も歓迎いたします。現在も修士論文を執筆中の参加者が参加してくださっています。毎月開催日のアンケートを取り、それから開催日を決めておりますので、1回だけの参加でも構いません。後期もGoogle meetを使用したオンライン開催を予定しております。

参加を希望される方は今後の予定などをお送りしますので、以下のアドレスまでお気軽にご連絡ください。

golf1006y@yahoo.co.jp



フランス語教育研究会

プチテコ番外編：

カナリア諸島の小学生とのフランス語文通プロジェクト

プロジェクト
活動報告

フランス語フランス文学科准教授



大塚 陽子

フランス語教育研究会では2023年冬から新たな取り組みを開始しました。「カナリア諸島の小学生とのフランス語文通プロジェクト」です。プチテコ・オンライン「フランス語発見教室」の受講者（小学校高学年～中学生）が、白百合学園小学校の児童と共に、カナリア諸島の小学生と手紙やビデオレターなどの交換をしています。

カナリア諸島は、アフリカ大陸の北西沖（モロッコの西側）に浮かぶ美しい群島で、スペインの自治州です。



このプロジェクトは、カナリア諸島最大の島、テネリフェ島にある小学校でフランス語を教えているアドナイ・ピショップ先生からのご提案により実現しました。

カナリア諸島の小学生にとっても、白百合小学校の児童やプチテコ・オンラインのメンバーにとっても、フランス語は学習中の外国語です。フランス語とスペイン語の言語間距離はフランス語と日本語の距離とはかなり違います。また学び方についても、週に1度のペースで学んでいるカナリア諸島や白百合小の児童たちと、フランス語に触れられる機会が年10回ほどに限られるプチテコ・オンラインのメンバーとでは大きく異なります。けれどもそんなことは大した問題にはなりません。お互いのことを知りたいという気持ちがあれば十分です。もちろんフランス語で手紙を書くのは容易なことではないですが、メンバー全員、興味を持って取り組んでいます。学んだ表現を実際に使いながら遠い国の同世代の子どもたちとコミュニケーションできるのは、とてもうれしいことのようにです。

これまでに2回やりとりをしました。1回目の手紙では自己紹介をし、2回目の手紙ではある日の過ごし方を話題にしました。手紙を書くときは、伝えたいことを考えて下書きをし、その後、相手を読みやすいようにきれいに清書をします。ユニークな便箋を選んだり、イラストで飾ったりすると、素敵な手紙が出来上がります。カナリア諸島から届いた手紙は、みんなで一緒に読んで楽しんでいます。同時に送られてくる画像や動画からは、テネリフェ島の美しい自然や、カナリア諸島の祝祭、小学生の日常などを見ることができ、いろいろな発見があります。

うれしい驚きもありました。文通プロジェクトがカナリア諸島のメディアに取り上げられたのです。インターネットの記事になったばかりでなく、新聞にも掲載されました。



現地紙Diario de Avisosに
掲載された記事（スペイン語）は
こちらから閲覧いただけます。

この活動は今後も続きます。カナリア諸島は新年度に入りましたので、新しいメンバーとやりとりをすることになります。どんな発見や驚きがあるのか、今からとても楽しみです。



フランス語教育 研究会の活動を ふりかえって

フランス語教育研究会の活動を
長年にわたり牽引されてきた

本学名誉教授・中井珠子先生からメッセージをお寄せいただきました

フランス語教育研究会では大学院生、学部生と教員が協力してさまざまな活動を行ってきました。なかでも重点をおいているのは大学以前のフランス語教育を広め、応援することです。

1994年度から2011年度までは「高校生のフランス語コンクール」を開催しました。毎年、全国40校ほどから短いフランス語劇のビデオが届き、参加校の先生方と審査を行った後、全作品を収録したビデオを送り返します。他の高校の作品が大きな刺激になり、年ごとにレベルが向上するのが目に見えて、やりがいのある催しでした。

最も長く続いている活動は2000年にスタートした小学生のフランス語教室「プチテコ」です。もともとはフランス語で教育実習をする機会が極端に少ないため、それを補う教育体験の場として考案しましたが、小学生にも人気が高く、現在も大塚陽子准教授を中心に続いています。フランス語教育に興味を持つ大学院生、学部生、卒業生、フランス人TA、留学生が教案や教材、小道具の準備から当日の運営までを分担します。年齢や立場の異なるメンバーが長期間にわたって協力し、社会貢献をする貴重な機会になっています。

小学生教室ではクイズ、ゲーム、歌、簡単な劇などを通じて、フランス語に親しむことを目標にしていますが、本格的に学び続けたいという要望もあります。中・高生の教室を定期的に開いた時期もありましたが、現在では「プチテコ・オンライン」に中学生3人、小学生1人が参加しています。年間10回だけの授業ですが、生徒たちは意欲的です。フランス人TAや南仏の少女と話したり、スペイン領カナリア諸島の小学生と文通をしたり、実際にフランス語を使えるのが大きな励みになっているようです。

この研究会の活動を通じてフランス語や世界への興味が広がることを祈っています。

本学名誉教授・本センター客員所員
中井 珠子



過去開催のプチテコの様子

アウリオン叢書 23

大衆文化とメディア

が刊行されました

責任編集 辻川 慶子先生（本学文学部フランス語フランス文学科教授）

言語・文学研究において、大衆文化やメディアをどのように理解し、考察すればよいのでしょうか。その制作条件や読者の期待について、何らかの共通した歴史的・理論的分析は存在するのでしょうか。本書ではこれらの問いを導きの糸としながら、近世から現代までの日本、フランス、英語圏における作品や事象の詳細な分析によって問題のありかを捉えようとしてきました。辻川慶子先生はじめにより

掲載論文

一九世紀とベル・エポックのフランス大衆小説入門

安川 孝

江戸のメディアミックス——出版と大衆

宮本 祐規子

「大衆」とマルクス主義批評

——ブレストン・スタージェス『サリヴァンの旅』を例に

木原 健次

一九世紀アメリカにおけるコムストック法の成立

——大衆印刷文化と検閲

箕輪 理美

ブルースト『失われた時を求めて』における庶民の言説

吉川 一義

++++

押井守『イノセンス』における「間テクスト性」について

アリア・デムナチ

豆腐とアナキスム——記号としての食

二村 淳子

〈子ども〉身体の変容性とアニメ

——宮崎アニメの子どもが「走る」理由

森下 みさ子

++++

メディアを横断するフィクション

——物語論再考

久保 昭博

ガストン・ルルーとジャーナリズム

——『シェリ=ビビの最初の冒険』の場合

宮川 朗子

日本の近代詩と映画

——シネ・ポエムにおける映像的表現

名木橋 忠大

連続物／シリーズの文化

マテュー・ルトウルヌー

大口でのお渡しも承っておりますので、
授業用テキストとしてのご利用などでご入用の際は、
言語・文学研究センターまでお問い合わせください。



編 白百合女子大学言語・文学研究センター
発行 弘学社
印刷・製本 欧友社

言語・文学研究センターから、今注目の最新情報をお届け。



2024年度談話会

Education for the 21st century

講師：パトリック・ニューエル先生

日時：2025年1月14日（火）3限

WeWork Japan顧問・TEDxTokyo共同創設者の教育活動家パトリック・ニューエル先生をゲストに、21世紀の教育のあり方を学び、共に考えます。

※詳細が決まり次第、お知らせいたします。

第59回白百合祭

2024年10月19日（土）・20日（日）開催の第59回白百合祭に合わせて、OG向け大学院チラシを作成しました。こちらは本学同窓会のご協力により、同窓会バザー会場のカフェテリアに設置させていただきました。『アウリオン叢書』既刊も展示し、来場された多くの方々にセンターの活動に興味を持っていただくことができました。

英語圏文化・文学コロキウム

2025年2月、開催予定。

※詳細が決まり次第、お知らせいたします。

2025年度
研究員・準研究員募集

2025年1月より、2025年度研究員・準研究員の募集を開始します。

更新手続きおよび新規登録手続きを希望される方は、メールでのご案内やセンターホームページをご確認ください。ニュースレターを読んでセンター主催の講演会・催しにご興味を持った方、論文の執筆を予定されている方はぜひご登録ください。

※申請手続きは通年受け付けております。



大学院チラシ

11号館カフェテリア



ささやながらセンター前にも展示を希望したところ、たくさんの来場者の方に足を止めていただきました！

おすすめセンター蔵書紹介

別冊太陽 日本のこころ175

三島由紀夫

松本徹・監修

平凡社、2010

三島由紀夫の生涯と作品を、写真で読み解く豪華な1冊。直筆の手紙や原稿、作品にまつわる資料を幅広く収録した見応えたっぷりの大型カラー本です。三島の愛猫家としての一面も知れるので猫好きさんにも！

とんぼの本

三島由紀夫の愛した美術

宮下規久朗／井上隆史・著

新潮社、2010

古代ギリシャ彫刻の青年像、聖セバスティアヌスの殉教図、耽美・退廃幻想芸術…。三島由紀夫が愛し、作品世界にインスピレーションを与えた芸術作品の数々をフルカラーで収録。アート好きな方必見です。

2025年
三島由紀夫生誕100周年
言文研も盛り上げます！



どちらも図版が中心で三島ビギナーからマニアまでおすすめ！

2025年度
談話会講師募集！

談話会で講師としてお話しくださるセンター員や大学院生を随時募集中です。研究発表の場として、研究者同士の交流の場として、ぜひご活用ください。詳細はセンターまでご相談ください。

「知の散歩道」講師募集！

杉並区立中央図書館で開催する講演イベント「知の散歩道」。

講演テーマは自由。講演スタイルも自由。一人でもグループでもご登壇いただけます。研究発表の場を探している方、大学院生の方、お気軽にご相談ください。

第7回佐々木みよ子賞
来春 応募論文募集！

2019年度に創設された佐々木みよ子賞も次回で7回目を数えます。言語・文学専攻の大学院生および同専攻に在籍したことのある方は、来年度春の応募期間をお見逃しなく！詳細はセンターホームページまで。

センター蔵書利用方法

言語・文学研究センターには、900点以上の蔵書資料があります。所蔵資料は、白百合女子大学附属図書館のOPACではなく、センター内PC内一覧から検索できます。

- ・貸し出し利用時間
言語・文学研究センター開室時間
(月曜～金曜の9時～17時)
- ・利用対象者
▷白百合女子大学教員
▷言語・文学研究センター研究員
▷言語・文学専攻の大学院生・研究生
(その他、文学部専任教員の了承を得た方)
- ・貸し出し冊数…上限なし
- ・貸し出し期間…2週間以内

CONTACT US

〒182-8525
調布市緑ヶ丘1-25
白百合女子大学1号館内2階
言語・文学研究センター
Phone: 03-3326-5294
Mail: gbkc@shirayuri.ac.jp

VISIT OUR WEBSITE FOR INFO ON OUR NEXT EVENT AND PUBLICATION !

